



木 木

千葉県 TEACCH プログラム研究会
2016年10月29日(土) 第86号

「森」字・佐々木正美
イラスト・竹蓋伸六

発行：千葉県 TEACCH プログラム研究会広報部

ホームページ：<http://www5c.biglobe.ne.jp/~teacch/site17.htm>

事務局：千葉県発達障害者支援センターCAS 内

TEL:043-227-8557



「学齢期の支援」 ～学校現場での視覚支援のとりくみ～

船橋市立西海神小学校 菅谷恵子 氏

特別支援学級から特別支援学校、そして再び特別支援学級という菅谷先生のご経歴から、多様な実践例をたくさんの写真とともにご紹介いただきました。

はじめに、菅谷先生は、学齢期の支援で心がけてきたこととして、以下の4点を挙げられました。

- ①わかりやすい教室環境を作るための物理的構造化
- ②見通しがもてるようにするためのスケジュールやワークシステム
- ③お互いに分かり合える双方向性を大切にしたコミュニケーション
- ④興味もてる・わかる・できる課題・教材（これが学校としては一番大事なところであるということでした。）

これらは、すべて、「(言われてできるのではなく)一人一人が自分で判断して、一人で安心して楽しく活動できる学校生活」という、先生が常にめざしてきた学校生活を実現することにつながっていました。

まず、特別支援学級での実践をご紹介いただきました。この高根台第三小たかね学級での実践は、朝日厚生文化事業団制作のDVD『親と教師のための自閉症の人が求める支援』でも紹介されています。集団での活動は難しい多様な12名の児童一人一人が、一人で活動できるように、「一人一人にあわせてかなり違っている」教育課程や日課が設定されていました。教室の環境設定では、個人のスペースを確保するなど、目的ごとに場所を使い分けたり、子どもたちの動線を工夫したり、という物理的構造化のアイデアが基本となっていました。スケジュールの使用については、日課表と同じ提示の子もいれば、トイレや係活動など細かく伝えた方が分かりやすい子、教室移動や授業準備を含めた提示で十分に動くことができる子…と、12名の子どもたち一人一人にあわせて、12通りのスケジュールが用意されていました。さらに、日々の授業や、そうじ、歯磨き等の日常生活面についても、学習内容、教材の工夫やワークシステムの使用によって、一つ一つの活動がわかりやすく設定されていました。これらの工夫によって、一人一人の子どもたちが「一人で活動できる」学校生活を実現できたことが、先生の見せてくださったたくさんの実践例の写真からよくわかりました。また、統廃合により学校が移転するという劇的な環境の変化の下でも、変化に弱い自閉症スペクトラムの子どもたちへの配慮として、「場所が変わっても構造は変えないように…」という点を強く意識されていたそうです。

次にご紹介いただいた特別支援学校でのお話は、これまで菅谷先生が実践してきた自閉症の子どもたちへの支援を、小学部全体として取り組んでいく過程についてお話を伺いました。5年間連続で自立課題製作の研修会を実施してきたことで、自立課題が定着して、どのクラスのどの子にも実施されるようになってきたそうです。また、自閉症として支援が必要な子どもを同じクラスにまとめることで、より構造化しやすくなる等、指導・支援がスムーズになっていったようです。特に、行事プログラムを視覚化する取組については、儀式的行事の式次第をステージ上に設置したスクリーンに投影したところ、子どもたちが前のステージの方向を向き集中するようになったとのことでした。画面として囲まれたことで、注目すべき箇所が明確になったという、自閉症の視覚的な特性が生かされていました。小学部全体として、学校生活や制作活動等のなかでも、「この子が一人でできるようにするにはどうしたらいいか」を常に考えるようになってきたそうです。

最後に、再び特別支援学級で担任された、アスペルガー症候群のお子さんの事例についてご紹介いただきました。彼は、教育課程と担任が一時に変わるという大きな変化や、自身の成長により気づくことが増えてきたからこそその課題により、学校生活が不安定になり、不安や不満を募らせていたようです。彼への指導・支援の方針では、視覚支援や本人の意思の尊重と自己決定、刺激の調整という、自閉症スペクトラムの特性に応じた支援が基本となっていました。特に、刺激の調整については、「集団の調整」が大変効果的であったようです。具体的には、他児の刺激の少ないタイミングで登校できるように登校時間を遅くしたり、個別の学習場所・時間を確保したりという取組がされていました。また、刺激となるものを「見えなくする工夫」「壊れなくする工夫」によって、彼が調子の悪い時でも、苛立って乱暴な行為につながることを予防したので、問題とされていた行動も減少してきたとのことでした。また学校として、外部講師を招いてのケース会議が保護者も交えて継続して開ける体制ができたことも…。

菅谷先生がご紹介くださった特別支援学級や、特別支援学校の事例でも、引継ぎが上手くいかず、支援が継続しきれなかったことが、課題となっていたとのことでした。しかし、先生のお話からは、特別支援学級に通う子も、特別支援学校に通う子も、自閉症であることは一緒で、視覚支援やスケジュール、物理的構造化をはじめ、支援すべきポイントの基本は同じ。それを、その子に合わせて、どの場面でどのように提供していくか、という違いだけだということが、ひしひしと伝わってきました。



菜の花リレー



小学校 特別支援学級における視覚支援の取り組みを紹介します。

千葉市立打瀬小学校 特別支援学級担当 島尾秀美



【朝の係活動】

★机の上に文字、写真カードを掲示する。
◎朝の支度の後、教員に「健康観察表をとりに行ってきます。」と言ってから行くことができるようになりました。



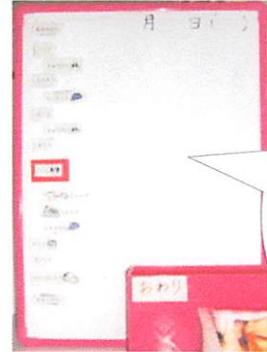
【体育】

★自分の走りたい周数だけ洗濯ばさみをつけて、1周ごとにはずしていくことで、最後まで一人で歩くことができるようになりました。



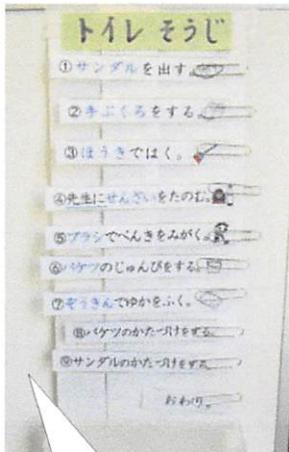
【下駄箱掃除】

★数字を表示し、その脇にメモ紙をはり、順番に拭いて、メモ紙をはがしていく。そうすることで、拭き残しがなくなりました。



【トイレ】

★スケジュールには、好きな赤い紙の台紙をつけて注目しやすくしたことで、一人でトイレに行くことができました。



【トイレ掃除】

★手順表をトイレに掲示
◎実施したら、項目ごとにカードをはずしていくことで最後まで掃除することができました。



【トイレ掃除】

◎掃除忘れがないように、ドアにも数字カードをはったことで、最後まで掃除をすることができるようになりました。

【拭き掃除】

★2色のテープを交互に雑巾の幅ではる。
◎テープを目印にして、順番に拭くことで、端から端まで拭くことができるようになりました。

平成28年度 TEACCHプログラム研究会 実践セミナーのお知らせ

日時：11月27日(日) 10:00~17:00 (9:30受付開始)

内容：ADOS-2検査及び評価の実習

講師：黒田 美保 氏 (名古屋学芸大学 教授)

会場：きぼ一 13階会議室1・2・3 (千葉市中央区中央4-5-1)

平成28年度 TEACCHプログラム研究会 第5回連続セミナーのお知らせ

日時：12月18日(日) 13:30~16:30 (13:00受付開始)

内容：「成人期の支援：入所施設における視覚支援の取り組み」(仮題)

講師：岸川 学 氏 (神奈川県立保健福祉大学 助教)

会場：きぼ一 13階会議室1・2・3 (千葉市中央区中央4-5-1)

〈編集後記〉菅谷氏の講演の後、身の回りにいる子供たちに目をやると、結構頑張っているではありませんか。今回は、そんな子供たちが自立している場面に目を向けて、少しだけ紹介することにしました。今後も、子供たちが安心して穏やかに、そして自立して活動できる学校を目指して、私も頑張ります。(島尾)